

## 呼吸器感染症

D会場( 11:20 ~ 11:50 )

座長 力丸 徹 ( 久留米大学第一内科 )

### D13. 重症マイコプラズマ肺炎の1例

九州大学大学院医学系研究科附属胸部疾患研究施設

竹山栄作、井上孝治、肝付兼仁、  
古藤 洋、川崎 雅之、原 信之

症例は26歳女性、会社員。元来健康であったが、平成11年11月初めより咽頭痛、咳嗽、高熱が出現。近医で肺炎と診断され各種抗生素剤を投与されたが低酸素血症が増悪するため紹介入院となった。画像上右肺野全体に広範な浸潤影をみとめ、急速な呼吸不全の進行のために人工呼吸管理を要した。入院当初、レジオネラ肺炎の可能性も疑い、検査と平行してエリスロマイシン・リファンピシン・シプロフロキサシンの投与を行った。その後の経過は良好で人工呼吸からは5日間で離脱、退院時には陰影はほぼ消失した。レジオネラ感染に関しては、気管支洗浄液の塗沫・培養・PCR、尿中抗原のいずれも陰性であり除外された。培養では検出できなかったが、発症時に陰性であった血清マイコプラズマ抗体価が著明に上昇したため、マイコプラズマ肺炎と診断した。

マイコプラズマ肺炎は一般に良好な経過をとるが、呼吸不全を呈するような重症例も少なからず報告されている。若年者の重症市中肺炎の鑑別診断上、示唆に富む症例と思われる所以報告する。

### D14. 急速に呼吸不全が進行し気管内出血で死亡したインフルエンザの一例

中頭病院

宮良高維、渡嘉敷かおり、下地 勉  
琉球大学医学部第一内科  
斎藤 厚

症例 76歳男性。

現病歴 平成12年1月31日より39°の発熱があり、インフルエンザの臨床診断で近医からアマンタジンを投与されていたが、呼吸困難感が進行し、2月2日に当院に入院した。

入院後経過 胸部に coarse crackle を聴取。レントゲン上は淡い浸潤影を左下肺野に認め、肺炎球菌の菌血症を伴っていた。血液検査所見ではWBCは 1100/ $\mu$ l、血小板数は 8.1万/ $\mu$ l と減少し、LDHが 994 IU/ml であった。入院直後から抗菌薬治療、ステロイドパルス療法を施行したにも関わらず呼吸不全は急速に進行し、入院翌日に人工呼吸管理となった。気道内分泌物中には一般細菌、真菌、カリニ原虫、封入体細胞等を認めなかったが、入院3日目に気管内に血性分泌物を多量に喀出して死亡した。死亡直後に小開胸して得た肺は出血性肺炎の病理像を示していた。気道内分泌物からはPCRでA型インフルエンザが陽性となり、抗 H3N2 亜型の血清抗体価は4096倍と高値であった。

結語 インフルエンザ感染により急速に進行する肺合併症例で出血性肺炎を来た例を経験した。

**D15. 慢性呼吸器疾患患者に対するインフルエンザワクチン1回接種の効果**

福岡県立嘉穂病院呼吸器科

上川路信博、高木陽一、加藤千鈴

大串 修

目的 慢性呼吸器疾患患者におけるインフルエンザワクチン1回接種の効果を評価することを目的とした。

対象と方法 当科を定期受診している慢性呼吸器疾患患者610名を対象とし、希望者にインフルエンザワクチンを1回接種した。29名を無作為に選択し接種前後の抗体価を測定した。また、臨床効果は、接種群(  $n=203$  )と非接種群(  $n=407$  )の間で、平成11年12月16日より12年3月15日までの入院率並びに入院時のC R P値を比較し検討した。

結果 A.ペキン、A.ホンコン、B.サントウそれぞれについて、128倍以上の抗体価を有する患者の割合は、ワクチン接種前が10%、45%、10%だったのに対し接種後は55%,86%,52%と著名な上昇を認めた。入院率は、非接種群が13%で接種群の11%と差を認めなかつた。入院時C R Pが4 mg/dl以上の患者は、非接種群の25名(6.1%)に対し接種群で5名(2.5%)と有意に少なかった(  $p<0.05$  )。

結論 慢性呼吸器疾患で通院中の患者へのインフルエンザワクチン1回接種は、インフルエンザに対する抗体価を上昇させ、重症の気管支炎・肺炎を約60%減らす効果があった。